

## 秋の採卵会のご案内

久しぶりに秋の採卵会を行います。皆さんご参加ください。

日時 11月21日(土)

場所 陣場山周辺

集合 9時30分 タヤけ小やけふれあいの里駐車場 (八王子市恩方町 陣場街道沿い)

最近高速道路が混むので、高速を使わないで行ける場所を選びました。

当日は仁平会長ほか採卵のベテランに指導していただきます。

ハヤシミドリシジミなど各種ゼフィルスが採卵できるはずです。

秋の一日を自然観察で楽しみましょう。

## \* クマソ拡大

関東地方のクロマダラソテツシジミはかなり拡大期に入ったようで、房総半島では初めて発見された館山市では海岸沿いにどこでも見られるようで、南房総市や鴨川市の西寄りの一部にまで分布を広げています。都内の港区、品川区、大田区の一部で発見されたものはその後新たな再発見は聞きませんが、神奈川県ではかなり広範囲に分布が確認され三浦半島はほぼ全域で見られます。といってもなぜか葉山町で記録がないのが不思議ですが、かなり内陸まで侵入しています。西は七里ガ浜、鵜沼海岸、茅ヶ崎から大磯まで海岸沿いに見られます。横浜市では金沢区となんと飛び地的に内陸の青葉区で発見されました。横浜市の北部や海岸沿いや川崎市なども大いに期待できますが、どういうわけかその辺はソテツが極端に少ないということです。

来季の発生もあるかどうかは未知数ですので、そのブルーの輝きを見ておきたい方は出かける一手でしよう。

## \* 新入会員 (宜しくお願いいたします)

久保田 瑛子 (あきこ) 〒151-0073 渋谷区笹塚 2-36-6-310 T:080-3281-7826

Akikokubota0603@yahoo.co.jp

## \* 住所、メアド変更

保坂 満 〒980-0011 仙台市青葉区上杉 2-5-1-301 T:022-715-0630

himegifutefu@moyagi.email.jp

山下 又幸 〒811-5223 壱岐市石田町久喜触 56 T:090-7388-1141

Iki.648@docomo.ne.jp

\* 来4月の例会は4/20です。宜しくお願いいたします。

\* 新聞紙上より



## オガサワラシジミ

オガサワラシジミ  
(2007年4月、日本チョウ類保全協会撮影) — 環境省提供

### 人工繁殖成功せず

09.9.13 読丸

小笠原諸島（東京）の母島にしかない国の天然記念物のチョウ「オガサワラシジミ」の絶滅を防ぐため、環境省が望みを託した人工繁殖が失敗していたことが12日、わかった。

同諸島の世界自然遺産登録を目指す政府は、来年1月に候補地推薦の手続きを取る予定だ。このチョウは、広げた羽が約2センチ。外来種のトカゲによる捕食で推定数百匹まで減少しており、生息数の回復が登録への最大の課題だった。5年間にわたる人工繁殖の試みが頓挫したことで、登録に黄信号がとまり、生息地の保全が急がれる事態になった。

絶滅回避へ挑戦5年

### 四季 長谷川 權



カネタタキ 読丸

鉦叩は秋の虫の一つ。チンチンチンと鉦を叩くように鳴くのでこの名がある。今、作者は私といっしょに一片の詩でも叩き出してごらんと誘っているのだ。秋のしじまの中、虫も一匹なら自分も一人。淋しさを知り尽くした者同士の共感。

詩句一片叩き出せよと鉦叩

戸恒東人

2009. 9. 17

# オガサワラシジミ繁殖失敗

国の天然記念物のチヨウ「オガサワラシジミ」の人工繁殖が失敗した。他の希少種で同様の失敗を繰り返さないためには、時機を見た迅速な対応と十分な予算措置が必要だ。

科学部 佐藤 淳  
地方部 宮澤 輝夫



## 要約

- ◇ 希少種の保護繁殖が叫ばれる中、国の予算は貧弱で、対策は後手に回っている。
- ◇ 保護のためには、生息地保全と人工繁殖対象種の選別を早急に行う必要がある。

オガサワラシジミは小笠原諸島(東京)の母島に生息している。生息数は推定数百匹。いつ絶滅してもおかしくないレベルにある。その復活をかけた人工繁殖が失敗した最大の理由は、対応の遅れの一語に尽きる。

50個体は昨年秋までにすべて死んでしまった。人工繁殖などの対策を盛り込んだ国の保護増殖事業計画は今年3月によろやくできた。

「生き物が相手の人工繁殖は、種によって適切な手法が違う。野生個体が十分

に存在している段階で、試行錯誤しなければ、成功率は大きく下がる」

東京農業大学の安藤元一教授(野生動物学)が指摘するように、失敗の背景には、生息地の保全が遅々として進まない現状がある。600万匹以上いるとされるグリーンアノールの根絶を目指し、環境省は07年に駆除事業を始めたが、今となっては焼け石に水。それだけに望みをつなぐ人工繁殖が失敗した意味は重い。

環境省野生生物課の塚本瑞天課長は「先行して人工繁殖に取り組みトキやアホウドリの繁殖地の整備にも資金が必要なので、予算が十分に回らない」と説明するが、オガサワラシジミが飛び回りながら繁殖できる

に1兆円を超える巨費を投じていることを考え合わせると、その貧弱さは際立つ。

予算不足から十分な保護対策がないのはオガサワラシジミに限らない。「絶滅危惧1類」とこれに次いで危機的な「絶滅危惧2類」に指定された生物は計3155種。このうち一種の保存法に基づき、保護増殖事業計画が策定されたのは47種に過ぎない。

東京の上野動物園は昨年、国の特別天然記念物のライチヨウの絶滅を防ぐため、ノルウェーに生息するライチヨウの卵を譲り受けて人工繁殖の技術開発に取り組み始めたが、この事業にも国の財政支援はない。

乱獲や開発による生息地の破壊に、外来種や高山域

天然記念物  
指定は1969年。80年代に入って外来種のトカゲ「グリーンアノール」による捕食で急減したが、最も絶滅のおそれが高い「絶滅危惧1類」に指定されたのは99年、人工繁殖が始まったのは、政府が小笠原を世界自然保護遺産の登録候補地に選んだ2年後の2005年だった。

今年まで5年続いた人工繁殖は、東京都の予算で運営される多摩動物公園が、他の昆虫類も含む飼育・繁殖予算の中で細々と続けてきた。環境省の許可を得て捕獲された成虫や卵など約

# 後手に回る希少種保護

## 貧弱な予算 生息地保全など急務



右上から時計回りにライチヨウ、オガサワラシジミ(環境省提供)、トキ、アホウドリ

大型温室を整備するといった本格的対策に取り組みなければ、手遅れになる可能性が高い。

環境省によると、保護増殖事業計画全体の総予算は昨年度計2億5000万円。政府が地球温暖化対策

のライチヨウを脅かす地球温暖化などの要因が加わり、危機は深刻化している。名古屋市

で来年10月、生物多様性条約締約国会議が開かれるが、ホスト国の日本が「第2のトキ」を出すことはもはや許されまい。

生態系の再生には手間と時間がかかる。長期的視点に立ち、絶滅のおそれが高い生き物たちの生息域全体の保全を目指すと同時に、優先的に人工繁殖に取り組み種を早急に洗い出す必要がある。国民全体で、地道な努力を支えるべき時期に来ている。

ゾウムシに魅せられた無線工学者



百匹百様の姿写真集に

枝川公一の  
東京  
ストーリー

人生二筋道。仕事と趣味と。どちらもゆるがせにしない。できない。仕事は NTT で PHS など無線通信技術の先端研究開発。後に大学で無線工学を教え、現在、慶大名誉教授。

小檜山賢二さん(67)にはもうひとつ、中学生のとき以来、長く夢中になっていたことがある。美しい蝶の写真。その生態撮影に、本土復帰前の沖縄にも、ニューギニアにも行った。

「ずっと蝶を追いかけてながら無線をやっていた感じ」

教壇に立つ少し前のこと、疑問がわいた。少年の日から付き合ってきた蝶に、初めて物足りなさ、限界を感じた。綺麗なだけでいいのか、と 50 代を目前にして、自然をさらに深く極めたい気持ちが沸く。

そして、ゾウムシに魅了された。この昆虫は、有名なコクゾウムシをはじめ、どこにでもいる。種類も多く、日本だけでも 1300 種はいるとも。しかし、多くは体長 1 ミリから数センチほどの極小な存在。近くにいるのに実態は謎。よく見ようとしても小さすぎて。

小檜山さんは、何よりも、この昆虫の形がさまざまなのに着目した。ゾウムシをデジタル撮影し、ピン上の合った写真だけで合成し、画像を三次元化するのに成功した。

バラエティーに富んだ姿かたち、心が浮き立つ。ゾウムシの名称のもとになった、象の鼻のような付属物あり、厚手のセーターに全身を覆われたかのようなのがいたり、走り高跳びの跳躍中みたいな体勢の虫もありで、百匹百様。

小檜山さんの関心は、長い付き合いの蝶の美しさから、ゾウムシの造化の不思議さへ移っていく。

どんなに小さな虫でも、身体の作りが雑になったり、省略されることなどない。ひとつひとつ最後の最後まで完璧につくり込んである。人間だったら、とても無理な作業。

知己が、ため息まじりに言った。「こんな細かい仕事がいっぱい。神さまはさぞかし、お忙しかったでしょうね」と。

職場が大学になり、小檜山さんの仕事は忙しくなるばかり。趣味のために自然のなかへ出かける時間はなくなっていた。屋内でのデジタル写真づくりならやれる。

さらに昨年春、晴れて定年を迎えた。「あとは自分の好きなことだけするから」と、仕事の誘いを断り、渋谷区の個人ラボを拠点に。その最初の成果が、今年の夏に刊行の写真集『象虫』(出版芸術社)。

「いい感じになってきた」と小檜山さん。半生の二筋道を歩き切り。

(ノンフィクション作家)